



# 日溜まり



川崎ゆきお

「寒いですなあ」

「冬ですから」

「そんなとき」

「はい」

「日溜まりです。日溜まり」

「ああ、日溜まりねえ。日向ぼっこができるような場所でしょ」

「もう向日葵も消えていますかね」

「冬でもコスモスはまだ残ってますよ。秋先、よく眺めていましたがね、最近は見向きもしない。やはりあれには鑑賞の匂があるのでしょうかねえ」

「向日葵は日を向く。人を向けば、向人葵だ」

「人はヒマワリじゃなく、ヒトワリかもしれませぬ。人を向く」

「それで、日溜まりじゃなく、人溜まりもできる」

「はいはい」

「さっき、ここまで歩いてくるとき、寒いですが、日溜まりがありましてね。日が射している場所です。そこに入った瞬間ぽかぽかだ。これは良い。安らげます。ほっと一息つけましたなあ。すぐにまた日陰になり、寒く厳しくなりましたが」

「夏場は日陰を選んで歩いていたのにねえ」

「あれも一息つけます。冬場の日溜まりと、夏の日陰は近いものがあります」

「そうですねえ」

「憩いとか、和むとか、安らぐとかは必要でしょうねえ。ただ、暑くも寒くもなければ、日陰も日溜まりも大したものじゃなくなる」

「それで？」

「ああ、感想ですよ。そういう和んでいるときは、面倒なことは考えない。まあ、休憩しているようなものですよ。ここでは、のんびりと、和むことに専念する。だから、そういうところで、シビアなことは封印です」

「ほっと一息を楽しんでいるわけですからねえ」

「そうそう。そういうときに面倒な話を持ち込んだりされると迷惑だ」

「何かありましたか」

「休んでいるときに起こされるようなものだからね」

「ありますよ。昼寝をしているときセールス電話で起こされることが。出るまで分かりませんからね、滅多に電話などかかってこないのに、何かあったのかと思うと、ネットが安くなりますが、とか、お墓の分譲がどうのとか、新築マンションのご紹介ですとか、着物高く買いますとか……」

「はいはい、ありますなあ」

「そんなことでわざわざ起きあがり、電話機をとる。これは何でしょう。迷惑な話だが、急用で身内からの連絡かもしれないしね」

「まあ、電話で良いことはあまりないですよ」

「セールスもそうですか」

「向こうから言ってくることは、向こうだけが益する話なんです。そんな良い話、相手から言っ  
てきませんよ」

「あ、シビアな話をしてしまいました。ここは日溜まりのような場でしたよね」

「そうですが、ずっと日溜まりにいと、のぼせてくる」

「のんびりするのには良いけど、長くは持たないものです。それに飽きるわけですね」

「だから、多少は忙しく立ち振る舞い、休憩が必要なときに、一息入れる。ずっと入れっぱなしじゃ、今度は刺激がほしくなる。休憩オーバーで、飽きてくるんでしょうなあ」

「はいはい」

「今度は軽く解決するようなトラブルがほしくなる」

「トラベルじゃなく、トラブルですか」

「人は勝手なものだ」

「はい」

「外敵がいなくなれば内紛を始める」

「内ゲバですねえ」

「懐かしいねえ、学生の頃が」

「ゲバ棒を売ってましたよ」

「ゲバラのゲバだ」

「暴力のことですよ」

「その当時に比べれば、世の中平和なように見える。頭を低くして暮らしていれば、平和なものだ」

「しかし、世の中、水面下で怖いことが起こっていると言いますよ」

「そんなのは、いつの世でも同じさ」

「はい」

了